

大陸（南支）

私の従軍記

— 広東から仏印へ —

長野県 中村 喜之助

昭和十九（一九四四）年七月八日、九竜から列車で広東へ着き、中山大学へ入りました。このとき、線路にコンクリート枕木が使われているのを珍しく見ました。中山大学へ着いた晩、米軍機の空襲を受け、海没で精神的に打撃を受けた後のためか、若い兵が窓から出ようとすると急いで取り押さえました。外を見ると機銃掃射の弾がコンクリートの敷地に当たってパッパッと火花を散らしていました。翌日から早速防

空壕掘りでした。

数日後、空襲警報が出て壕へ入った時、隣の壕の中に毒ヘビがいると、あわててこちらの壕へ移って来たこともありました。その後は壕に入らず、夕食をすませて暗くなると、少し離れた広場へ退避し草原で寝転んで南十字星を見上げ、内地のことなど思い出し語り合ったりしたものです。日曜日に広東の街への引率外出も楽しみでした。

九月三日から湘桂作戦に続いて明号作戦に参加し、十二月になって広東省の奥地で警備につきました。

従軍中の大失態は武鳴付近で駐留していたときのことです。ある日私は南寧へ連絡の命を受け、早朝起床依頼で起きて武装しようとしたところ、下士官室の銃架に置いた小銃、帯剣が五人分ないのです。内務班へ

手入れに持っていったのかと調べましたがない。私は取り敢えず借物で出発し、夕方帰隊したところ中隊では全員で終日捜したが不明で、その後も数日捜索しましたが全く手がかりがつかめずに終わりました。

中隊の宿舎は出入口は一カ所で不寝番がおり、しかも小銃五丁と帯剣五人分ですから、一人で持てる量ではなく、またこの部屋に五人寝ていて、誰も気付く者がなかったのです。通常なら大事件ですが、作戦中であり、当時の状況からそのままになりました。紛失の数量は仏印へ入るまでに員数を揃えましたが、不思議な事件でした。

私の山本第二小隊は中隊本部から南の軍公路沿いの呉村と記憶している部落の警備をしておりました。この部落から南は軍公路が岩山の間を通っており、守備の点では地形が悪く、小銃（十八人）の戦力を誇張するため無線装備のあるように竹竿で針金を張ったり、入村した時から無人になっていた部落で定期的に朝市が開かれるようになったのを幸い、住民が多く集まっ

た頃を見計らって、防毒面を被って演習の動作をしたり、親しくなった住民に誇大宣伝として、戦闘になれば一発で数百人を殺傷する爆弾を使うと、笑い話のよくな触れ込みを伝えておりました。

ある晩、歩哨から「連絡自動車が襲撃されたりしい」と報告を受け、外へ出て見ましたら、南の方角で大きな火柱が上がっていましたが、当小隊としてはどうしようもありません。ある日、この部落から東南方の山の中に、米人宣教師が経営するハンセン病患者收容の療養所（病院）があり、そこへチェッコ機銃六丁を持った約三百人の兵が移動してきて、軍公路襲撃計画しているとの情報が入り攻撃しようと留守居に四人残し十四人で出撃しました。

予定通り早朝、目的地手前に到着したものの、病院の建っている草原の端は高さ三〇〜四〇メートルの切り立った渓谷で、そこに谷川が流れ掘りの役をしています。このため渡るのに手間どったため、洗濯に来ていた女性に発見され、その知らせで病院では鐘を鳴らして急を知らせ職員、患者皆逃げ去ってしまっていま

した。

馬三頭などを押収しての帰途、常々好意的に食糧微達を受けてくれる部落にさしかかったところ突然、部落の中央に孤立する岩山から一斉射撃を受けました。このため馬と荷物を後方へ置いて田んぼの中を突進、部落へ入りました。住民は見当らず、姿を見せると、頭の上から撃たれるので、動けなくなりしました。今来た反対方向の丘を越せば、小哨まで遠くないから、私が小哨へ飛んで、残留者を連れて来て脱出の援護をすることに、部落を飛び出しました。

一本道を走ったとき、左の丘の上から一発撃たれ左足に衝撃を感じましたが、そのまま走ったら、突然丘の上から声をかけられ、見たら中隊の沢田少尉とその横には今撃ちあっている部落の村長さんがいて驚きました。事情は中隊本部から沢田少尉が小哨へ連絡に来て、着いたところへ村長さんが駆けつけ「日本軍と撃ち合いになったから来てくれ」とのことです出て来たこと分かりました。

部落の人々は我々の駐留する方角と反対の山から馬

を引いた兵隊が来るのを見て、土匪と勘違いし、撃ち合いになってから相手が日本軍と知り、村長さんが小哨へ駆け込んだことでした。無事に小哨へ帰り、押収してきた馬は小隊で飼うことにし、物品はハンセン病の感染があつては大変だから、必要な物は必ず煮沸消毒してから使用すること、その他の物は焼却するように指示し注意しました。私の同年兵・竹村が紙幣の束を持っていて、数日後自動車隊の人からこの紙幣が仏印の通貨であると聞き、私も二枚もらいました。部落から飛び出した時撃たれた傷は幸いに軽く、左足ふくらはぎの擦過傷ですみました。

北支から陸路を南下して来た光兵団の兵団長は先の陸軍省軍務局長の佐藤中将で、終戦と同時に指令で飛行機で内地送還となり、後日A級戦犯として死刑になった人で、兵は沖繩、九州出身者でした。ある日通過中のこの部隊の兵が、私達が苦勞して宣撫した部落へ入って略奪をやつたため、部落住民が泣いて助けを求めて来たから、私が部隊の本部と思われるところへ行つて「このような行為はやめてほしい」とお願いし

ました。

ところがその回答は「この部隊の多くの者の郷里は今米軍の攻撃を受け、家族は殺され家屋、財産もなくなっている。食糧が不足していたから徴発に出たので、住民のことより自分達のことを考えなければならぬ。文句があるなら俺達と撃ち合いをしよう」とのことです。全く話にならずに帰りました。

彼らの北支からの苦勞と郷里のことを考え、さらに彼等は敵の戦闘機の機銃掃射を受けても、決して逃げ隠れもせず、撃ち向かってゆく動作は自暴自棄とも思われませんが、無理もないと思われました。

転進の兵団通過が終わり、軍公路守備がとかれて、仏印へ進駐することになり、昭和二十年六月六日、南関（現在の友誼館）を通過して仏印へ入ったとたん、視野が開け平和で豊かな田園風景、街の明るい表情に目を見張り、萱笠を被った女性の後姿に見惚れ自然に安南娘の歌も出ました。久しぶりに電灯に接し、外出して呉村から持ってきた紙幣の価値を知りました。二〇ピヤトル紙幣でしたが、三〇センチ角厚さ三

（四センチのカステラ二枚一ピヤトル、食堂で飲んで食べても二ピヤトルくらいでした。

仏印の通貨を持たない中隊内で、第二小隊がたくさん持っている噂になり、分け前をねだられ、若い者はカステラを買ってお分けしたことでした。南下してドンホイ（洞海）から海岸線と別れて、カムロで駐留したときも、生まれて初めて生のパイナップル、その他熱帯地方産の果物を十分に食べ、ここから山へ入ることと、残金を出し合って、砂糖や干物を買って携行しました。

昭和二十年七月二日、第二大隊は南方総軍の直轄大隊の命を受けバクセに入り、総軍最後の複郭陣地構築を命ぜられました。構築作業が始まる直前に終戦となりました。中隊では兵の動揺を抑え、力を合わせて郷里へ帰り祖国復興に努力しようと固く誓い合ったものです。

私はバクセ駐留中に、メコン河の連絡船を経営している華僑と知り合い、親しくなりました。彼は「日本は負けたのではない、必ず近いうちに来るようになる

る」と語っており、「仕事の拡張を計画しておる。逃げて俺と一緒に仕事をしないか」と熱心に言われました。出発の前日には、別れのごちそうをしてください。帰っても必ず来てくれ」と別れを惜しんでくれました。九月二十九日、ウボンへ向かって出発しました。

昭和二十年十月二日、ウボンへ到着。数日後、第五中隊から小隊長以下十五人と記憶しておりますが、作業要員を出すよう命令があり、私達第二小隊長以下出ることになりました。どんな作業に当たるのか、敗戦の今日では悪くすれば帰れないこともあろうと覚悟を出発しましたが、指定地へ着いてみたら、兵舎の監視でした。黒人の兵隊が少数おり、多くの棟数の建物は空家になっており、私達は一番端の棟の二階の一室を居場所に指定されました。特別作業の指示はなかったのです、昼間おそるおそる兵舎の間を回って、煙草の吸い殻を集め、不足している煙草の補いをしました。

兵舎監視から帰って、再び作業要員として、今度は少し長期間になるかもしれないとのことで、再度第二

小隊から出ることになり、覚悟を新たに出発しました。無蓋車で輸送された山の中へ着き、指示された作業は爆弾の整理でした。樹木の茂った中に、草に覆われて大きな二〇〇キロ以上と思われる物が、雑然と積まれていました。少人数でどうするのだろう、大変な作業になるぞと直感したのでしたが、心配したより軽作業で助かりました。

ウボンの楽しい思い出は、炊事場の残物等の廃棄場へ集まる多くのハゲタカを小銃で撃つことでした。一発一羽は当たり前、一発で二羽を狙って撃ち、獲物は料理していただきました。ここで武装解除を受け、十一月十六日ナコンチョークへ向かいました。

十一月十八日ナコンチョーク到着。軍の集結地建設に当たりました。作業の間の山芋掘り、バナナ採りも懐かしい思い出となっています。休日には各分隊も一部の者を残して、山へ出かけ、斜面で芋づるをたぐって、なるべく掘りやすく、一つの穴で複数の芋が採れる場所を探したのです。注意しないと、掘っているときにサソリが出てきました。収穫した芋は次の休日ま

で食べ継ぎのできるように一日の分を予定し夕方飯盒で茹でて、食事の補給にしました。青いバナナを採ってきて、庭に穴を掘り、バナナと青草を交互に積んで土を被せ、太陽の熱で蒸して食べられるようにすることも覚ええました。

大隊で中隊対抗の演芸大会の催し、第五中隊では劇を出すことになり、木下泰さんが、アッツ島玉砕をテーマにしたシナリオを書かれ、その主役に私が指名されて、素人で生まれて初めてのこと、毎晩月の光の草原で練習し、幸い当日大好評をいただきました。

第二大隊は八百人でノンホイ作業隊として新任務を受け、昭和二十一年一月七日出発、ノンホイに一月九日到着、作業につきました。

自分達の兵舎造り、道義山を中心に環状道路を建設、その両側に雨期に備えて深い側溝を掘り、この道路に添って一万人と言われた傷病患者と病院関係者の病棟宿舍造り、井戸掘り、さらに連合軍から指示される使役要員に多くの隊員がとられ、病院での死亡者の火葬とその薪造り、そして自給自足を目標に野菜裁

培、製紙、製陶からバナナの木を裂いて干した草履作り等々、一人として休んでおれない日々でした。

建物は何でも材料は竹と椰子の葉が主体で、自分達の建物として、床へ屋根をかけたくらいのもので、昼間は中隊に二三人勤務者がいる程度でしたから、盗難防止のため携行した物は靴まで棚の上へ縛り付けておきました。病棟は長さ二五メートル横六メートルの規格で五、六人一組で一週間が仕上げの目標でした。

昼間は暑いから夜間作業を多くして行われ、井戸掘りも徐々に深さが求められ、終わり頃には二〇メートル以上も掘った所がありました。

時々糧秣使役の指示があり、夜間作業でしたが、なるべく多くの者が出るようになりました。貨物列車を駅でない所に停車させ、貨車から降ろして野積みにする作業でしたが、予定時間内に終わらせなければならぬから忙しかった。しかし、帰りに分隊で一袋くらい持ち帰ることを覚え、これができたから厳しい連日の作業にかかわらず、十分食べられ、体力が維持できたと思います。

病院には、終戦時バンコク付近に居た日本人女性を保護するため、すべてを看護婦として収容したとのことで、身分、職業も様々で子供を連れた人もおり、我々の着くまでは風紀も乱れていたようです。道義山の中腹にあった看護婦宿舎を竹矢来で囲み衛兵を配置し、道義山を清掃して整斎されました。各病棟に衛兵と看護婦がいましたが、作業中しばしば目に余るところがあり、その度に制裁を与えたから、彼らも作業隊の兵には一目おくようになり、患者から陰で礼を言われたこともありました。ある日地区の周囲に張った竹矢来の所で、禁止されている外の住民との物々交換をしている将校を見つけ、病院の従事者はかりでなく患者であっても階級は問題にせず制裁を与えたこともあり、作業隊は規律を守るに厳正でした。

各作業が進んだ頃、地区司令官の宿舎を建設する命を受け、私は五人でこの作業にかかりました。大工経験者を中心として、手元にある資材で良い建物を造ろうと少ない木材、板を集めて進めました。残念ながら、作業がだいぶ進んだある日「明日連合軍の使役に

行く人員がたりないから、一日行ってくれ」とのこと、翌朝例によって迎えのトラックで出かけ、作業を指定する係から、私と隣にいた者が連れて行かれた所は、被服や食糧品の倉庫で、下士官が一人いて私に与えられた作業は日本刀を造れとのことでした。

困ったことになったが、仏印へ進駐する前呉村小哨で、南方の奥地へ行って切り込み隊として使えたらと、皆で自動車のスプリングを削って、刃物を造ったことを思い出し材料工具をお願いし、どうせ急ぐことはない、やれるだけやってできなかったら、急病人になつて、適当な者と交代してもらえばと腹をきめ、作業は長くかかると断っておきました。待遇は良く、一日に数回コーヒーをいれてくれ、昼食時には炊事場へ連れて行かれたくさん残っている料理を出して、食べた残りはこの穴へ捨てろと教えられ、午後にはバナナを与えられ、さらに帰りには捨てる物だから持って帰れと、肉の煮たものを飯盒に入れてくれました。

朝の作業指定係に伝え翌日から指名で行くことになり、分隊の者も帰りにお土産が楽しみで行くことに賛

成でした。数日後彼に連れられて下士官室と思われる部屋へ行つたところ、机の上に日本刀が四振り置いてあり、四人で何か言い合つていて、私にどの刀が一番良いか順に並べろとのこと。武装解除で日本将校から押収した軍刀を、功績があつたのか、この四人に与えたものと察したから、時間をかけ、丁寧に見て渡したら喜んでいました。次々に渡し最後に世話になっている下士官に、古刀と見られ少し短いが立派なものを渡して、帰ってからの刀が一番価値があると説明したら、大喜びでした。従つて私の刀造りは不要になりました。

ここは氣候に恵まれているから、復員は寒いシベリア、満州が先で、私達は最後になるだろうと予想していたのですが、意外に早く乗船できるとの報に喜びました。宿舎の取り壊し後、片付けにも一段と活気が出て、これまでできて、残されては残念と持ち物にも注意し刃物等検査で疑われそうな品は井戸へ捨てて埋め、所持品検査、戦犯調査にも無難に通過して、六月十二日バンコク到着。復員船「輝山丸」に乗船、六月十九

日バンコク港を出港できました。

乗船した船は終戦の時、連合軍に押収されたもので、復員輸送が終われば相手国へ引き渡すことになっていて、故障が多いが完全修理をしないと聞いていました。そのため、時々エンジンの音が止まり、甲板に掲出されている航行図には当日の船の位置が記入されていましたが、エンジンが止まって潮に流され後退していることが度々ありました。

それでも広東の中山大学で空襲を避けて、夜間草原で寝転んで居た時「一度内地へ帰って日本の娘さんと結婚したい」という希望の言葉には皆同感だったし、ノンホイで夜間作業の帰り満点の星を見ながら「内地へ帰ったら、今までの苦勞を無にしないよう祖国の復興に頑張ろう」と誓いあった。その希望、願いが叶えられると思うと喜びに満ちていました。

しかしそうした中でも、数日過ぎた頃から退屈からか、あるいは今まで押し殺していたうっ憤が爆発したのか、毎晩甲板上で他隊の制裁が行われていると耳に

しました。長期にわたって生死苦楽を共にし、目的遂行のため協力、支え合って幾多の困難難儀を踏み越えてきたであらう戦友同志が、最後の場面で争うなんて誠に残念で悲しいことでした。その原因は何であらうと、双方が終生心に残る汚点となり後悔することになると考え、万一この中隊に他隊と同じような行為を策する者がいたら、私は体を張っても阻止しようと考えていました。ある者の動きに注意するよう情報を伝えてくれる者もありましたので留意して見張っていました。だが、幸い第五中隊にはそのような無頼漢はおりませんでした。

ただ一つの娯楽道具はナコンチョークで、中隊有志全員で協力して作ったマージャン牌で船室の中央部に卓を設けて行いましたが、使用希望者が多いから予約制にし、二日くらい先までの予約になっていました。

給食の御飯が少ないことから、考えられたのがろうそくで炊飯することでした。ノンホイ出発のとき残っていた米を携帯していましたが、缶詰の空き缶へろうそくを削って入れ、包帯で芯を作り、バケツの中で

燃やし、芯すれすれに飯盒をつるし、洗面器で蓋をしておくと、ろうそく一本でちょうど飯盒一杯が炊けたのです。

七月八日、予定より相当遅れ、しかも舞鶴行きを鹿兒島行きへ変更してようやく本土の土を踏むことができ、昭和二十一年七月十一日、復員列車でそれぞれ郷里へ向かいました。

帰途、都城駅で婦人会の方々がお茶の接待をして下さった時は、敗戦を忘れ、出征する時のような錯覚を感じ、内地ではこのように我々の帰りを待っていてくれるのだ、今度は郷里で今まで以上頑張らなければと覚悟を新たにしました。

復員から相当歳月が経過した頃

軍司令官賞詞官へ島山大隊長の主旨書が添えて送られてきました。それ以前に従軍中には、私共に知らされなかった戦況や、終戦後の諸情況を「歩八六会報」で知り、特に私の所屬した第二大隊については大変な

行動をしてきたと感じていたものです。いただいた資料で、終戦前後の足跡の要点を回顧してみます。

「歩八六会報」に掲載された畠山大隊長の

「湘桂以後の第二大隊」より

南寧から鎮南関約二〇〇キロを湘桂作戦直後は、原、勇の二個兵団で守備しており、その後勇兵団は仏印へ戻り、原兵団のみとなり、さらに、二十年六月十六日、畠山大隊長が着任と共に、わずか一個大隊（歩兵一個中隊、山砲一個小隊、工兵一個小隊を付す）で守備命令が下された。当時対峙する全面の敵は四十四万、約三〇〇倍であり、その後方には米式装備の精鋭四個師を始めとした二〇〇万の大軍が満を持していた。

我が軍の不利を承知で指一本ふれて来なかったことは不思議だったが、第八十六部隊の精鋭は敵の総司令官、白崇禧將軍も充分承知していたからと思われた。奇跡的に無事任務を遂行し、六月六日、仏印ランソンへ入ったのでした。

死を避けた連続勤務

昭和十九年、第二十二師団は南方へ転進することに、第八十六連隊主力は第三次輸送船団として、四隻の輸送船に分乗し「初雁」「栗」の駆逐艦二隻に護衛されて六月二十四日上海、呉淞港を出港しました。

私の第五中隊は貨物船第二十八共同丸（二二三二トン）に輜重兵第二十二連隊、主力第八十六連隊第六中隊、第一機関銃中隊の一部、歩兵砲中隊の一部、その他の部隊で兵員約一二〇〇人、馬一二〇頭が乗船。第五中隊は指揮班と第一小隊は階上船室。私の第二小隊は階下の船室が指定されましたが、人員に対して船室が狭く、取り敢えず、分隊毎に主要兵器をまとめて、部屋の隅へ置いてみたが、小隊全員が座れないうえに、部屋の中は蒸し風呂のような暑さのため、連絡上居場所を明らかにして、なるべく甲板へ出て居ることになりました。

十四年次の者はそれぞれ甲板上へ陣取り、勤務も避けており、私は同年の者数人と部屋に残っておりました。出港して二日目とします。蒸し暑いから裸で放

談していたら、隣の事務室から事務長さんが来られて「状況が悪い、いつ攻撃を受けるかわからない。すぐ逃げ出せるように支度をしていたら」と注意されながら、雑談の輪に入られて状況などいろいろ話して下さいました。

私達は南方転進を知った時から、祖国へ二度と帰れないと心に定め、死を超越した覚悟でいるから、どのような事態になろうと驚くことはないと伝えたところ、事務長さんも同じ覚悟のようで、最悪の場合船と運命を共にすると語っておられました。

中支においては、負けることを知らなかった我が部隊ですが、六月二十九日台湾高雄港に寄港したとき、甲板へ出て、港の入口から進行する横に沈没した船の帆柱が何本も立っているのを見て、我々の船もいつ、このような状態になるとも限らないと戦局の厳しさを感じました。二日間の停泊中、外出の許可は出されなかったが岸壁で水浴し、被服の汗を流すことができ、この時加給された、青くて弓なりに曲がり、細長いバナナの味は格別でした。

その後、南方はもとより戦後同年の戦友と台湾旅行の際、特に高雄で思い出の品を捜しましたが見当らず、あの時の味と香りは今も懐かしい思い出になっています。

七月一日、高雄港を出港。敵の目を逃れるため、フィリピン群島北方まで大回りして進んだのですが、私は前日三日の正午から対潜監視長の勤務に就いて、七月四日午前一時、ちょうど船の右舷上甲板で小隊長と夜の海を眺めながら雑談していたところ、右前方を航行していた「日東丸」から大きな火柱が上がったのです。入隊前に絵本などで見た光景そのものと感じました。同時に周辺で大きな水柱が数本上がりましたが、空爆にしては飛行機音がなく、艦砲射撃音も聞こえず、何によるものか不明でしたが、敵の潜水艦に狙われていることを知り、緊張しましたが、無事夜明けとなりました。

朝食をすませた頃だったと記憶していますが、同年の週番勤務に就いていた栃木県出身の福田敬雄君が来

て「今日、対空監視長に就く者がなくて困った」と言ったから「俺が勤務してやる」と軽く言ったら、彼は「受けてくれるか」と喜んだ。この一言が数時間後死を避けることになったのです。

歩哨交代を同年の竹村上等兵（駒ヶ根市出身）に任せ、週番司令に勤務の下番と上番の報告をすませて、上甲板最前部中央へ戻り、竹村君から歩哨交代の報告を受け、二人で昼食にしようとして「食べるうちぐらい、いいだろう」と救命胴衣をはずして、一口二口食べたとき「来た来た」と言う大きな声に、急いで救命胴衣を着けた途端、船がぐらぐらと大きくゆれ、同時に左へ大きく傾いて、二人は左舷の手すりまで滑り落ち、見ると甲板上に積んであった兵器や筏などが、なだれのように落下しており、飛び込むことは危険でした。

右舷へ這い上がって見ると、下甲板から続々飛び込んでおり、一瞬躊躇したが、海面がぐんんと近づいてくるのを見て「かまわん飛び込め」という掛け声と一緒に飛び込み、水中へ沈んで夢中もがいて水面へ出

たから、船から離れなければと泳いだが思うように進まず、後ろを振り返って見たら、船の姿は見えなくなっていました。

少し泳いでいたら、ドラム缶が流れてきたから幸いとかまったが、付近に居た二三人もつかまり、このままでは長時間保てないと考え、流れてきた角材を見つけて移り、腰に付けていた麻縄で体を括り付けました。護衛艦の投下する爆雷の振動がずしんと腹にこたえました。そうしているうちに徐々に中隊の者が集まり、木材や竹筏を集めて大きな筏となり、その上に乗れるようになりました。

「第二十八共同丸」は

十二時四十六分三十秒 東砂島西南西二二キロ

北緯二〇度三二分 東経一一五度二〇分海没

乗船者戦死五〇六人 うち第五中隊六十二人

助かったと思うと空腹を感じ、持ち合わせた竹筒の焼米を分けて食べ、元氣を取り戻して軍歌を歌って、救助を待ちました。

数時間後、「栗」が近づいて縄梯子を下ろして、急

いで登るように言われました。停泊していると、潜水艦に狙われやすいとのことで、集団の遭難者を救助すると急いで出発しました。残念でしたが離れていて救助できなかった者もいたと思われ、浮いている遺体も見受けましたが、確認できずに去りました。

陸上でこれだけ犠牲者を覚悟すれば、相당한戦闘ができるものを、海上ではどうすることもできないと悔みました。

「栗」の水兵さんの話では、魚雷が船の中央に命中し、船が真二つになって、垂直に一分四十秒で轟沈したから船が真二つになって、垂直に一分四十秒で轟沈したから渦がでさず助かったもので、よく助かったと言われました。「栗」の艦長さんは松本市出身とお聞きし、夕食に支給された白米のおにぎりは、久しぶりに内地の味が腹にしみました。

五中隊戦友の話

「魚雷の一発目は船尾を逸れたが、二発目が船の中央に命中した。甲板上のポートの下に陣取っていた、

十四年次の者五、六人は爆風で飛ばされた。

階上船室にいた者は、窓が小さく脱出できなかった者が多い。階下船室に居て助かった一人は「急いで階段をかけた。ちょうど甲板へ出たときに波が来て、俺の後から上がって来た者は水に押し流されてしまった」

七月五日、九竜港へ入港して、港の倉庫へ入ったが、上陸する姿は痛ましく敗残兵姿で、中には禪一本の者もいました。兵器を持った通常の軍装姿の者は見受けませんでした。

被服、兵器の支給を受け七月八日、列車で広東の中山大学へ入り次の作戦参加の準備にかかりました。

〔編注〕

中村喜之助氏の入隊から中支戦線までの手記は、ⅩⅠ巻に掲載されております。